年の初めの姫初め？

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

惰眠を貪(むさぼ)る以上に手軽な快楽は存在しない。

目が覚めても、すぐに起床しなくていい。これは低血圧の人間にとっては救いで、寒い冬時期は特にありがたい。更に二度寝が出来るなら、これ以上の幸せはそうないと思う。

だが、幸せな時間ほど無惨に打ち砕かれるのが世の常だ。

そう、こんな風に――

「――ハッピー・ニューイヤー！」

俺の部屋のドアがノックもなしに開かれ、元気のいい声が俺の耳朶(じだ)を打つ。面倒なので寝返りを打つふりをして、声の主に背を向ける。

「起きてよ、お兄ちゃん。もうお昼前だよ。年はとっくに明けてるよ」

無視。俺はまだ寝ていたいのだ。

「もう。起きないんなら……お邪魔しま～す」

掛け布団をめくり、声の主が侵入してくる。背中にぴたりと触れてくる手の感触――いや、手だけでなく全身だ。服越しなので体温こそ伝わってこないが、恐らくコアラの親子のような光景になっているだろう。

「ねえ、このまま姫始め――する？」

先ほどまでと違う艶っぽい声音。衣擦れの音。

この状況は――まずい。

「何が姫始めだ。新年早々、血の惨劇は御免だぞ」

俺は侵入者の行動を止めようと、百八十度身体(からだ)の向きを変えた。そこにいたのは小柄な少女だ。ショートカットの茶色の髪。猫のような黄色の瞳。多分に幼さを残した容姿は可愛いと評判で、『妹にしたい』と言われているとかいないとか。

ベアトリーチェ。

それがこの少女の名前だ。ＺＳ(ゾイエス)学園中等部に通う一年生。見た目通りの天真爛漫な性格だが、妙にあざといというか、自分のキャラを理解した上での言動をする事も多い。

我が家に同居している三姉妹の末っ子である。

今日は正月だからか和服を着ているのだが、帯が解(ほど)けかけ、肩がはだけて肌が見えている。歳相応の体格なので、色気はない。

「……どうしたの、お兄ちゃん？」

ないはずなのだが、上目遣いにこちらを見つめ、蠱惑(こわく)的に微笑む姿は妙に背徳的な色気がある。自分に対して好意を持っている相手に、こんな表情を向けられれば、理性など保

てるはずがない。俺だって一応は十代男子な訳で、そういう欲求がない訳じゃない。

だが――

「――何をやっているんですか汚らわしいすぐにベアトリーチェから離れてください気持ち悪い通報ですね死ねばいいのに」

新たな声と共に、部屋に少女が入ってきた。そう、ベアトリーチェに不埒（ふらち）な行為を働こうとしたところで、鉄壁のガードマン――この場合ウーマンなのか？――に邪魔されるのだ。

……いや、邪魔がなくても何もしないが。

「新年早々、お盛んですね。ダメ人間のくせに性欲だけは人一倍ですか？　あなたの遺伝子など残す価値は皆無だというのに」

容赦のない罵倒を俺に向けてくるのは、俺と同年代の少女だ。緩く波打つセミロングの銀髪。常に半眼気味の金色の瞳。可愛いというよりは綺麗と評される容姿で、『罵倒されたい』と一部の層から強い支持を受けているらしい。

タオエン。

ＺＳ（ゾイエス）学園高等部に通う一年生。常にポーカーフェイスでテンションも一定。それは絶対零度の眼差しと、相手の精神を容赦なくえぐる毒舌のコンボを放つ時でも変わらない。

ベアトリーチェの姉で、三姉妹の次女である。

「……判ってると思うが、今回もベアトリーチェの方から迫ってきたんだからな。それに、まだ何もしてない」

「ええ、判っています。あなたがそんな度胸のないヘタレでダメ人間な事くらい。しかし、ベアトリーチェのあまりの愛らしさは、そんなあなたですらも淫行に走らせる危険性があります」

「……どんだけ姉馬鹿なんだよ」

これがタオエンという少女だ。極度のシスコンで、ベアトリーチェが俺に懐いているのが気に入らないらしく、一日一回は罵詈雑言を浴びせてくる。

「行きますよ、ベアトリーチェ。まったく、せっかくの着付けが台無しです」

「はーい。早く降りて来てね、お兄ちゃん。二度寝しちゃダメだよ？」

部屋を出ていく二人を見送りつつ、タオエンが着物の着付けが出来る事実を改めて訝（いぶか）しむ。彼女の場合、嗜（たしな）みでなく、下心があるように思えてならない。合法的に女体に触れるためとか。

まあ、個人の嗜好や性癖をとやかく言うつもりはないが。

二度寝するなと釘を刺されてしまったので、仕方なく着替えて一階のリビングに降りる。すると、黒い着物を着た少女と鉢合わせた。ベアトリーチェとタオエンは着付けのやり直しをしているのだろう、姿が見えない。

「――あ、あけましておめでとう！　その……今年もよろしくな、アサト」

少し頬（ほお）を赤くし、テンパり気味に告げてくる少女。

その姿に、俺は言葉を返せずにいた。

正直――見惚れていた。

「な、なんだ？　何かおかしいか……？」

少女がそわそわと落ち着かない様子で自分の姿を検（あらた）める。

ポニーテールにした長い黒髪。吊（つ）り目がちな橙色の瞳。体型を隠しやすい着物の上からでも判る抜群のプロポーション。凛とした雰囲気から大和撫子と呼び声が高いが、実際、着物が恐ろしいくらいに似合っている。

ヤミヒメ。

ＺＳ（ゾイエス）学園高等部に通う二年生で、俺のクラスメイト。古風な口調が特徴的で、普段は落ち着いているのだが、取り乱す事も多く、割りと感情の振り幅が大きい。

ベアトリーチェとタオエンの姉で、三姉妹の長女である。

「いや、別におかしくないぞ。着物姿が珍しかっただけだ」

心を落ち着け、何事もなかったように言った。タオエンほどでないにせよ、俺もポーカーフェイスには自信がある。

「そうなのか？　しかし、ベアトリーチェも着物姿だったはずだが……」

ヤミヒメの不安は解消されていない。なおも不安げな視線を俺に向けてくる。

言えない。ここで『見惚れていた』と言えば、ベアトリーチェの比じゃないくらい似合っていたとか、お前は特別とか、そういう意味に聞こえるだろう。

「ベアトリーチェの時は寝ぼけてたからな。よく見てなかった」

嘘だ。しかし、ベアトリーチェの時も動揺したとは言えない。

「そうか……うむ、ならばよい」

ほっとした表情で微笑むヤミヒメは、ベアトリーチェよりも無邪気な子供に見えた。三姉妹の中では一番大人びた容姿の持ち主なのだが、年齢相応のメンタルを持っているのは彼女だけかもしれない。ベアトリーチェとタオエンは妙に達観している節がある。

「――あ。ちゃんと起きてきたね」
「あのまま永眠してくれていてもよかったんですよ」
件（くだん）の二人が姿を見せた。タオエンの毒舌は聞き流す。
「タオエン、お前も着物なのな」
「ええ、せっかくですので。あなたのために着ている訳ではありませんので、視姦するのはやめてもらえますか？」
聞き流す。
「初詣（はつもうで）でも行くのか？」
「そうだよ。近所の神社なら、そんなに混んでないから」
えへへ、とベアトリーチェが着物を見せびらかすようにくるりと回った。あざとい。
「そうか。気を付けてな」
俺は無神論者だし、そういうイベント事にも興味がない。何より寒い中を出歩きたくない。
「何を言っておるのだ。正月など他にやる事もあるまい？　ならば付き合うがよい」
ヤミヒメが呆れ顔を向けてくる。確かに、親戚回りもデパートの初売りにも行かなければ、初詣くらいしかやる事はない。俺はずっと寝正月でも構わないのだが。
「ねえ、行こうよ。わたしも、お兄ちゃんと屋台のわたあめとかたこ焼き食べたいなあ」
そんな事を言いながら、さりげなく俺の腕に絡んでくるベアトリーチェ。それにむっとするタオエンとヤミヒメ。タオエンに関してはシスコンだからだが、ヤミヒメの場合はよく判らない。はしたないとか破廉恥だとか、そういう感情かもしれない。
「判った。判ったから離れろ、ベアトリーチェ。また着崩れるぞ」
こういう時は俺が折れた方が、結果的に面倒事が少なくて済む。これが俺の処世術だ。
「本当！？　じゃあ、早く行こ！」
「俺、昼飯まだなんだが……」
「屋台で食べればいいよ」
「私もそのつもりだったので、昼食の用意はありませんよ」
「マジか……」
ベアトリーチェとタオエンの言葉に愕然とする。
起きてすぐ外出。気が滅入る。
「その前に、写真を撮っておきましょうか。せっかくの着物ですから」
「じゃあ、わたしお兄ちゃんとツーショットで！」
「不本意ですが、それは後です。まずは三姉妹で。姉さんは真ん中でお願いします」

「ん、ここでよいか？」

タオエンが用意していたデジカメを俺に渡し、シャッターを任される。いつもの事だが、慇懃無礼な奴だ。もう慣れたが。

撮影モードを切り替え、ピントを合わせる。問題なさそうだ。ヤミヒメが真ん中に立ち、その右腕にベアトリーチェが抱き付き、左腕に寄り添うようにタオエンがフレームに入った。

「二人とも、そんなにくっ付かなくともよかろうに」

「えー、いいじゃない」

「そうですよ、姉妹なんですから」

実に仲睦まじい光景だ。

「じゃ、撮るぞ」

俺がそう言うと、タオエンが意味ありげな視線を向けてきた。嫌な予感がする。何かする気だ。

「ベアトリーチェ、そんなに力を込めるな。少し痛いぞ」

「えへへ、ごめんなさ～い」

「いけませんよ、ベアトリーチェ。姉さんを困らせては」

そう言いつつ、タオエンの手が少しずつヤミヒメの着物をはだけさせている。ヤミヒメはベアトリーチェに気を取られていて、気付いている様子はない。

「えーっと……ヤミヒメ？」

「ん？　どうした、アサト？」

教えてやった方がいいだろうとヤミヒメに声を掛けたが、タオエンに射殺さんばかりの視線を向けられ、俺は黙った。

「……いや、何でもない」

「む、そうか？　これ、ベアトリーチェ、そんなに体重をかけるでない」

確信した。ベアトリーチェもタオエンと共犯（グル）だ。

タオエンがヤミヒメに気付かれないように、大きく頷（うなづ）いた。撮れという意味だろう。

見れば、ヤミヒメの着物は左側が大きくはだけ、時代劇のクライマックスで刺青（いれずみ）を見せる将軍様のようになっていた。

シャッターを切ると同時に、ベアトリーチェがヤミヒメの気を引き、タオエンがはだけていた着物を直した。恐るべきコンビネーションで、気付いていないのは当人だけ。

ちなみに、デジカメはすぐにタオエンに回収された。この画像を巡って一悶着あるのは、少し後になってからだ。

この画像が何に使われたのかは知らないが……俺は何も悪くない。

年の初めの姫始め？〈了〉

あとがき

新年、あけましておめでとうございます。流遠亜沙です。

ＺＳ（ゾイエス）〈ゾイドチック・ストラテジー〉『年の初めの姫初め？』をお届け致します。

これまではタオエン視点の話でしたが、今回はアサト視点でお送りしました。なので、タイトルはパロディではありません。思いつかなかった訳じゃないんだからね！？

正月用にイラストを描いたので、せっかくだからと今回もショートストーリーを書きました。所要時間は四時間弱ほどです。

改めて感じるのは、過去に書いた作品のキャラを含め、やはりヤミヒメが一番乙女ですね。『ＺＳ』もタイミングを見て、本格的に再開したいです。最近、妙にラブコメが書きたい。

それでは謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。これが掲載されているという事は、年を越せているのだと思います。しかし、未だに予断を許さぬというか、何も状況は変わっていません。今後も、いつ終わるか判らない綱渡り状態が続くと思いますが、とりあえず続けられる限りは続けたい所存です。なので、それまではお付き合いいただけると嬉しいです。

それでは、また次の作品でお会い出来ればと思います。

そして、今年もよろしくお願い致します。

――古風なツンデレ、あざとい小悪魔、クールな毒舌、お好みの娘はいますか？

２０１４／１２／３１　流遠亜沙

アンケートに答える

『ＺＳ〈ゾイドチック・ストラテジー〉』ページに戻る